

# アメリカ映画産業における教育プログラムに関する調査研究

後藤 昌人\*1・中田 平\*1

email: masato@kinjo-u.ac.jp

\*1: 金城学院大学 国際情報学部 国際情報学科

◎Key Words 映画産業、撮影ロケーション、デジタルコンテンツ、教育プログラム、演技

## 1. はじめに

我々はデジタルコンテンツの制作からテレビやネット配信までの一連の教育を、試行錯誤のなかで環境を整えながら実践してきた。その延長線上で、我々は映画制作教育に2011年から挑戦してきた。これまでの研究において、アメリカの映画専門学校（ニューヨークフィルムアカデミー、以下 NYFA）での調査や関係者へのヒアリングを行ってきた。同時に2012年から合計63名の学生をロサンゼルスユニバーサルスタジオにてショートフィルムを撮影するプログラムを実行してきた。また、2012年8月下旬～9月上旬には、ニューヨークでの映画教育の実態を調査した。本稿では、ロサンゼルスにおける調査に加え、ニューヨークでの舞台（ミュージカルを含む）・映画の演技指導に関する教育プログラムの調査、及び市内での撮影に関する申請等について調査報告、考察することを目的とする。研究の将来目標としては、日本の大学での映画に関する教育プログラム開発につなげることである。

## 2. 映画教育プログラム開発の動機

大きな動機は学生がコンテンツを作ることの意味と価値を、実践を通じて学習する点である。誰もがコンテンツを生成できる時代になった一方で、多くの学生はコンテンツを日々消費する側の立場にもなっている。いわゆる「しっかり」と作られたコンテンツを「作る」ことの苦勞や難しさを簡単にパスして、コンテンツにアクセスできるようにもなっている。そのこと自体は決して悪いことではないが、よりレベルの高いコンテンツを自分の手で一から制作する技術、プロセス、その意味や価値も大学教育の中で総合的に身に付けて欲しいとも考える。映画はこれらを学ぶために多くの要素を含むコンテンツであるが、映画という分野には時間や金銭面など多くの制約があり、手を出すことができない。その中で、金城学院大学の国際情報学部での海外研修必修化に伴い、一つの研修

プランとして、ロサンゼルスでの映画制作が現実化してきた今、映画制作への挑戦機会と捉え、コンテンツ制作の幅を広げることへも繋がると考えた。

## 3. NYFAの教育プログラムに関する調査

本稿では詳細を省略するが、NYFAでの教育の最大の特徴は、映画産業と一体化した、徹底的な実践教育にある。本研究におけるNYFAニューヨーク校における調査では、ActingとMusicalの授業の視察が主な目的であったため、ミュージカルや舞台役者を目指す学生のクラスを集中的に視察した。

Meisner（マイズナー）方式で演技指導を行う授業は、はじめに全員共通の台本を頭に入れ、登場人物全員のセリフを覚え、自然に出てくるまで練習を重ねている学生の授業であった。Meisner方式というのはSanford Meisner（サンフォード・マイズナー）が考案した演技術のことで、マイズナーテクニックと言われる演技教育理論として、現在のアメリカでの演技指導に取り入れられているようだ。

別の授業では、複数人の講師が、編集済みのショートフィルムに出演している学生たちの演技と撮影技術について、的確な批評と解説、改善策などを説明し、学生が納得いくまでディスカッションをする形式をとっていた。最後に視察をしたミュージカルの演技指導の授業では、ブロードウェイの舞台に立った経験を持つような講師が、学生を圧倒する迫力で生のピアノ演奏をバックに、目に見えない空気感や表現のテクニックを理論的かつ多彩な表現で講師自らがお手本となり、学生に的確にアドバイスをする指導法であった。

このように、教育の原点とも言える講師の実演や実践も徹底されている。多くの講師陣は、現役の役者や、ハリウッドで活躍する俳優の演技指導を行っている、まさに実績と質ともに保証されたラインナップである。また、教室やスタジオは、ニューヨーク市内に点在しており、必要に応じて学生が移動して受講する形式である。一見非効率のようにも見えるが、ニューヨーク自体に数多くのスタジオやレッスン環境がある

ことを考えれば、既存の充実した環境を利用しない手はなく、むしろプロや現役の役者がオーディションやレッスンをやっている環境と同じ場所で学生が学べるのは、ニューヨークで学ぶことの大きな利点とも言える。この点は、講師が授業中に学生に対しての教育の中でも触れていた点でもある。つまり、10分も移動すれば演技に関する世界のトップに触れることが出来るニューヨークで学んでいること自体が、オンリーワンの環境であり、それを日々の学びで活かさないのは愚かであるという考え方である。

#### 4. 撮影環境に関する調査

通常、映画の撮影にはセットを使う場合と、街中や公園などのいわゆる公共スペースや私有地を借りて撮影をする場合がある。調査からもニューヨークの街中での撮影に対する制度やマニュアルをはじめとするバックアップ体制が非常に充実していることが分かった。主要な公園や公共施設、道路や建物など、場所に応じた撮影に関する注意事項、手続きの手順、費用や関係者、近隣住民に対する周知方法まで、誰でもオンライン上で確認することが可能である。また、プロから学生までがオンラインで撮影申請することができ、最短で数日程度で撮影許可がおりることもあるという。場合によっては、学生の撮影であっても警察が出動し、道の封鎖や交通整理を行うこともあるようだ。このように撮影関係者は、オンライン上で申請を行うだけで、行政と警察、消防などの組織をまたいで撮影のバックアップを受けることができ、その体制が映画やコンテンツ産業を活性化させる一役を担っている。規模や内容の違いにもよるが、教育目的での学生による撮影が、プロによる撮影申請と同等な扱いで処理されることから、結果として映画教育の機会均等の一端を行政が担っている点も先進的な例である。

次に、我々は今まで二回にわたり実施してきたNYFA ロサンゼルス校で映画撮影研修の中で、関係者にユニバーサルスタジオ・ハリウッド (以下USH) のバックロット利用に関してヒアリングをすることができた。NYFA は授業内での撮影に、バックロットと呼ばれる広大なスタジオの一部のセットを使用する契約をUSHと交わしており、映画の撮影スケジュールがあいているセットを使用することができる。利用料は、セットごとに決められているようで、高いものは一日の利用料が百万円近くに達する。この価格はユニバーサルの経営方針等に左右され、近年は値上げするセットも多いようである。しかし、学生にとつ

てはこの上ない環境であり、数多くの世界的に有名な映画の撮影に使われてきた場所で、撮影できることは何にも増して高いモチベーションを作り出す。過去二回の研修において実際にバックロットで撮影を行った学生は、一様に口を揃えて二度と経験できない貴重な機会と言い、撮影環境に対する満足度は高かった。

#### 5. 独自の映画教育プログラムへ向けた考察

本調査からも、NYFAの映画産業と一体化した実践的な映画教育には、多くの参考になる点が含まれていた。特に以下の内容は日本の大学教育においても実行可能なプログラムのポイントとして考えられ、調査で得られた考え方や指導法は多いに参考になる。

- ・ 映画を撮影する目的や意図の明確化
- ・ 映画の撮影に必要な知識や原則論等の理解
- ・ シナリオを作るために必要な基礎知識の習得
- ・ カメラの使い方と各機能の意味、撮影テクニック
- ・ 音声の収録方法や、照明の扱い方の習得
- ・ 実践的な演技指導
- ・ 撮影環境のバックアップ
- ・ 編集の基礎知識と編集ソフトの使い方の習得

特にカメラの使い方や撮影の技術的な点については、ロサンゼルス校の研修でも行っていた実践型学習であるHands on形式が有効であることも分かった。これらをいかにして大学の教育の中に落とし込み、コンテンツ産業と一体化した実践体制を作るかを、今後さらに具体的に調べてゆく必要がある。

#### 6. おわりに

調査からも実践をしながらのコンテンツ制作経験が生み出す学習の効果は計り知れない。特に成人の能力開発の大部分は経験によって説明することができ、塾達者を育てる上で最も重要な方法は「良質な経験」を積み重ねることにあるとされている。コンテンツを消費する立場であることが多い学生が、ゼロから制作に取り組む経験としては非常に価値の高いものであり、教育プログラムとして確立したいと考えている。

#### 参考文献

- (1) 松尾睦著 『経験からの学習 プロフェッショナルへの成長プロセス』 同文館出版、2006
- (2) エティエンヌ・ウェンガー、リチャード・マグダーモット、ウィリアム・M・スナイダー「コミュニティ・オブ・プラクティス-ナレッジ社会の新たな知識形態の実践」、翔泳社、2010
- (3) ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー「状況に埋め込まれた学習-正統的周辺参加-」産業図書、2011